

白井克彦

産・官・学

共に力を合わせて

『知の市場』——主に社会人
対象の完全にオープン
な生涯学習プログラムである。

これには、二つの大きな意味がある。第一は「現場基点」「互学互教」「社学連携」という理念に表されるように、様々な機関や個人が自発的に参画し活動することを基本とする、いわば草の根運動だということである。しかし、内容は大学院レベルで、時代の潮流を導くことを目的に、一科目は二時間授業十五回（二単位）を基本として成績評価も厳しい、大変新しい生涯学習の形を社会に提供している。第二は、規範科学（レギュラトリサイエンス）の重要性を世の中に広めることである。人類は、技術革新によって大きな社会発展を成し遂げてきたが、同時に発生してくる

『知の市場』と生涯学習

大小様々なリスクに対応するために、多様な制度改革や組織改編を余儀なくされてきた。昨今の急展開する技術革新は、その地球規模の利活用によって、人類を含む生物全体に様々な影響を及ぼす可能性がある。これは、専門家だけの問題でなく、一般社会人にも、多大な関心事となっている。「知の市場」は、増田優教授（お茶の水女子大学）が始めた「化学・生物総合管理の再教育講座」が発展したもので、七年目を迎える。現代の技術革新とその問題点を中心テーマにして、強い学習意欲を持ち、他分野の人々と協力関係を持ちながら自己実現を図ろうとする人々の活動の場として発展している。二〇〇九年度は全国二十三カ所で開講し、定員を超える四千三百七

十四名の応募があり四百六十八名が受講した。今年度は、本学規範科学総合研究所、主婦連合会・製品評価技術基盤機構、労働科学研究所、お茶の水女子大学、農業生物資源研究所、化学工学会SCEネット、鳥取県動物臨床医学研究所、産業医科大学、名古屋市立大学、福山大学など全国三十二カ所に拡大して百五科目を開講している。二十一世紀は、知的基盤社会と言われ、世界中が大学の強化競争に入っている。国民の個々の知的能力が高いだけでなく、科学や技術を革新し社会を絶えず改革していく活力がなければ、他国に対する優位性を持ってないし、グローバルな貢献もなし得ない。こうして見ると、日本の高等教育の欠陥が見えてくる。

大学レベルの知の体系は、当然ながら、膨大な大きさ、深さ、複雑さを持つのであるから、例えば、四年間の学部教育で、身につくものは、本当にわずかである。知の体系には、それぞれに構造的性があり、一つの典型を深く学んだり、実際を経験することで、他分野への理解も導かれる。また、様々な社会とのコミュニケーションによって、科学や技術と社会の関係をどのように作るのかを考えられるようになる。このような学習とそれを実践につなげることは、生涯学習の仕組みがあつてはじめて可能になる。日本社会が十八歳から二十二歳の単純な高等教育システムのみには依存せず高度に発展するためには、生涯学習型社会への転換は一つの重要なキーとなる。



しらい・かつひこ

[早稲田大学総長]

※『知の市場』URL: <http://www.chinoichiba.org/>